

Title	学位授与者氏名及び論文題目；学位請求論文審査の要旨及び担当者
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.98 (2024.) ,p.107- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000098-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学事報告

学位授与者氏名及び論文題目

修士（社会学）

- 第1564号 奈良 遊一 上方社会的比較と身体不満足感、心理的ウェルビーイングの関係—利用SNSのモダリティに注目して—
- 第1565号 青山菜美楽 在外バンングラデシュ人の現地社会における適応戦略—日本と韓国の事例から—
- 第1566号 王 一涵 日本における外国人家事労働者受入れ制度と労働者の権利保障—在日外国人家事労働者の実態調査から—
- 第1567号 王 テイ Analysis of the Effects of Employment and Life Stage on the Life Satisfaction and Happiness of Married Women—Is the Division of Household and Childcare Responsibilities by Spouses Effective for the Psychological Benefits of Married Women?—
- 第1568号 鎬木 凜 母親の精神疾患と子ども—子どもにとって母親の精神疾患が持つ意味—
- 第1569号 黄 雨萌 アナログレコードの利用と満足——若年層に対するインタビュー調査
- 第1570号 宋 沛林 中国の年の差きょうだい——第一子のライフコースへの影響を中心に——
- 第1571号 譚 陽瑩 在日中国人留學生のSNS利用とSNS疲れに関する研究
- 第1572号 張 紫瑩 SNS利用とフェミニズムへの認識・態度に関する研究—中国の若年女性を対象に—
- 第1573号 張 俐映 ゲーム産業におけるリメイク現象—『ファイナルファンタジーVII リメイク』を事例として—
- 第1574号 チン ジャユエ 企業のブランディングにおけるジェンダーレス志向と消費者の意識
- 第1575号 新居 未唯 ペットの家族化を再考する——飼い主と犬は何を与え合っているのか
- 第1576号 朴 恩震 中国の民族政策の変容と少数民族の社会意識—延辺朝鮮族自治州における朝鮮族社会について
- 第1577号 文 受彬 Chauvinist and Racist Comments on News Portals: An Analysis of Heavy Users
- 第1578号 森 麻里永 人道主義的統治を問い直す：池袋の公園における「こころの相談」の人類学
- 第1579号 吉岡 知輝 大韓民国における漢字使用の現状と展望に対する一論考—変化する「東アジア共有財産」の動態と韓国の未来世代—

修士（心理学）

- 第1580号 西山 優希 子ども2者間の会話・動作の相互作用—自然言語サンプルを用いた分析—
- 第1581号 王 馨怡 体験した出来事における時間的ドップラー効果の心理学的検討
- 第1582号 櫻木 麻衣 Effects of unconscious tactile stimuli on autonomic nervous activity and afferent signal processing

- 第1583号 高野 茉夕 ハシブトガラスにおける外部寄生虫数の変化をもたらす行動要因の検討
- 第1584号 二木 貫行 環境変動下における鳥類の集団採餌の資源配分に関する実験的検討
- 第1585号 楊 詩韻 Behavioral characteristics of art appreciation under situations of high ecological validity
- 第1586号 和田 健太 鳥類のついばみ行動における視覚利用の種差の検討

修士（教育学）

- 第1587号 小野寺 亮 定時制高校の生徒は2000年代以降どう変容したのか—3名の教師のオーラル・ヒストリーを手がかりにして—
- 第1588号 本郷 直人 雑誌『信濃教育』に見る西田哲学「受容」—信濃哲学会員守屋喜七・菅沼知至の教育論を中心に—

学事報告

学位請求論文審査の要旨及び担当者

博士（2023年度）

博士（社会学）[2024年1月17日]

乙 第5327号 久木元 真吾

若者の「自己と仕事の連関」に関する研究

[審査担当者]

主査	慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員 社会学修士 稲葉昭英
副査	慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員 社会学修士 織田輝哉
副査	東京学芸大学教育学部教授 社会学修士 浅野智彦
学識確認	慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員 社会学修士 織田輝哉

I 本論文の構成

本論文は、現代日本の若者が自分自身および自らの将来についてどのように考えているのか、その意味世界を仕事との関連に注目しつつ探究することを目的としている。具体的には、自らの将来的なキャリアないし人生において自分自身と仕事の関わり（「自己と仕事の連関」）について若者たちがどのように意味づけを行い、了解しているのかに照準して分析・考察が行われている。

1990年代後半以降、新卒後にすぐ就職して定年まで同じ勤務先で働くという従来の日本社会で一般的であった働き方・生き方は急速に自明なものではなくなり、フリーターや非正規職につく若者が増加していく。その中で、自分自身の関心や好みを仕事の選択の基準ないし参照軸とすることは、若者たちによって肯定・否定・推奨・批判などさまざまな形をとりながらもたびたび語られるようになり、それは現在に至るまで継続している。本論文は、若者の「やりたいこと」「ネットワーク」「不安」という3つの側面に着眼し、若者自身が生きる意味世界を探究することによって、現代日本の若者たちにとっての「自己と仕事の連関」の解明を試みている。論文全体の構成は以下のようなものである。

【目次】

- 第1章 問題設定とアプローチ
- 第2章 「大人」への移行の形の変容
- 第3章 「やりたいこと」という論理——フリーターの語りとその意図せざる帰結
- 第4章 広がらない世界——若者の就業と相談ネットワーク
- 第5章 広がらない世界のその後——30代の就業と相談ネットワーク
- 第6章 不安の中の若者と仕事
- 第7章 30～40歳代未婚者の意識と不安
- 第8章 不安の中の「やりたいこと」
- 第9章 「好きなことを仕事にする」ことの変遷——『好きを仕事にする本』を事例に
- 第10章 若者の「自己と仕事の連関」と日本社会

II 本論文の概要

第1章では、本研究の問題設定が説明されるとともに、本研究が採用するアプローチとデータについて説明がなされる。研究の方法として若者の意味世界、すなわち主観的な世界の理解を行うために自由回答やインタビューなどの質的なデータを分析対象とする方法論を採用することが示される。

第2章では、全体の議論の出発点として、欧米および日本の「大人への移行」に関する先行研究をもとに概念の整理と理論的な再構成が行われる。従来の移行は、①直線的で不可逆的なものであり、②さまざまな面での移行が連動して進み、③誰もが移行を経験し完了するという前提がある「古典的な」移行モデルであった。しかし現在ではとくにヨーロッパでは、①移行は可逆的な可能性を帯び始め、②諸側面の移行が連動するとは限らなくなり、③誰もが移行を完了できるとは限らない、という特徴をもつ「ヨーヨー型」の移行へと変容が生じていることが示される。「大人への移行」にとって働くことの持つ意味が相対化されつつあり、「大人」と「働く」を新たな形で再接続することが求められていることが日本社会にとっても課題となっていることが指摘される。

第3章からは若者にとっての「自己と仕事の連関」について具体的なデータに基づいた分析と考察が行われる。第3章ではフリーターの語りの分析から「やりたいこと」を重視する就業意識とその帰結について分析がなされた。フリーターたちは正社員としての就職にこだわらず自分の「やりたいこと」を優先すべきという論理を重視している。そこでの論理は「やりたいこと」なら続けられる、ただしそれが何なのかは「今はわからなくてもよい」、それは「いつかきっと見つかる」という構造を有している。この論理からすると、「やりたいこと」と無関係な正規職の仕事への就職は正当性を欠くものとなり、逆にこのことによってフリーターであることが正当化され、そこから離脱しにくくなるといった「意図せざる帰結」が生じてしまうことが指摘される。また、「やりたいこと」という言葉が、現実の厳しい就業状況の中で、それでも途中でやめずに続けられる仕事を表す表現として語られていることが明らかにされている。

第4章と第5章では、若者の社会関係すなわちネットワークと仕事との関連について、労働政策研究・研修機構のワークスタイル調査データを用いて計量的な分析がなされている。第4章では、社会学者ラルフ・ダーレンドルフの「ライフ・チャンス」（生活上・人生上の機会）、「オプション」（選択肢）、「リガーチャー」（結びつき）という概念を用いて若者の相談ネットワークと就業状況や意識との関連につ

いての分析が行われる。この結果、①若者にとって職場は相談ネットワークが供給される場であるが、②非正規雇用や失業・無職の場合、職場関係の人が相談ネットワークに加わりやすく、家族や友人が代替する例や、相談相手がいない例もみられる、③非正規雇用や失業・無職であると、多方向的でない形の小規模で限定的な相談ネットワークが帰結されやすい、ということが明らかにされている。

第5章では、30代の若者の相談ネットワークと就業状況や就業に関する意識との関連について、20代を中心とした第4章の結果と比較して考察がなされる。①非正規雇用や無業であることによって、相談ネットワーク全体のあり方が多方向的でない形になる可能性は、30代においてより顕著であること、②全体として30代の相談ネットワークは縮小ないし減少していることが明らかにされている。

第6章と第7章では、社会調査における自由記述の回答をもとにして、若者の将来についての「不安」に注目した分析がなされる。第6章では25～39歳の若者たちの将来への不安について、働くこととのかかわりを中心にした分析がなされる。そこでは①「将来に対して不安を感じる事が多く」かつ「自分の将来の見通しは暗いと思う」若者が、全体の過半数を占めるほど多く存在しており、②将来の展望が見えにくい中で「現状にとどまることの不安」がみられ、③特徴的な語彙として、現状を打開し、今とは異なる新しいステージに移ることを志向する言葉が多くみられることが示される。しかし、④そのような志向は同時に「現状を出ていくことの不安」を喚起するため、その結果として、⑤二つの不安を同時に抱えた状態が長期化しており、その過程をいかに有意義な時間にしていくかが、若者たち自身にとっても課題になっていることが明らかにされている。

第7章では、30～44歳の若者に尋ねた自由記述形式の質問に対する回答を素材に分析が行われる。特に未婚者が抱く不安についての記述に注目し、仕事、親の介護、病気に関する現在と将来の不安について、具体的な記述の検討を通じて考察がなされる。その上で、年齢のタイミングを限定しない形で新たなキャリア形成を可能にしていくことや、さまざまな事情を抱えながらもキャリアを形成していくモデルをつくることの必要性などが指摘されている。

第8章と第9章では、再び「自己と仕事の連関」の主題化について考察がなされる。第8章では、第3章以後の日本社会の変化をふまえ、現在もなお「やりたいこと」を語る若者の状況について、「ネットワーク」と「不安」についての分析をふまえた考察が行われる。将来への不安が強まる中で、「やりたいこと」が何か具体的に見出されたとしても、そのことが将来をめぐる不安や見通しの悪さを解消することには必ずしもならず、すべてを解決するものではないという現実的な認識の広がりが見られること、そうした不安を相談ネットワークが緩和する可能性について指摘がなされている。

第9章では、「自分の好きなことを仕事選びに際して重視すること」が、主にこの20年弱の間にどのように語られ、位置づけられてきたのか、そしてその位置づけがどのような変遷をみせたのかを、1998年から2016年まで刊行されていた雑誌『好きを仕事にする本』（2008年以降は『私にずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』に誌名変更）の記事を対象として分析が行われている。当初は「好き」ゆえに目指す「憧れの仕事」のガイドという性格が強かったが、2000年代半ばからは「転職」という一般的な表現に移行し、やがてその仕事を長期にわたり継続することが前面に出るようになる。2010年からは「一生モノ仕事」のようにさらに継続性が強調され、2013年以降は「将来の保険になる」という観点が加えられるなど、確実な収入の確保など仕事の条件に対する重視が強まっていく。その中で「好き」であることは、当初はそれだけで仕事の選択にとって強力な動因たりえたが、その後は求められる複数の条件のうちの一つという程度のものになっていくこと、ただしそれは「好き」であること

が重要性を失ったというわけではなく、「好き」も含めた諸条件のすべてが重要視されるようになったことが明らかにされている。

第10章では研究全体の結論として、①現在の日本社会において「キャリア探索期の常態化」ともいうべき事態が起こっているということ、②「自己と仕事の連関」は若者にとって一貫して重要なものであったということ、③仕事やキャリアの選択をめぐっては、「自己と仕事の連関」に代表されるような特定の条件だけが重要視される形ではなくなっているということ、の3点が指摘される。その上で、「自己と仕事の連関」は若者の生き方において満たされるべき条件群の不可欠の一つになったと結論付け、今後の日本社会にとっての課題として、①若者たちの仕事の模索が長期間にわたることの社会的な承認・受容と、②その過程にある若者が一定の生活上の安定が得られるような保障のしくみをつくることの2点が主張されている。

Ⅲ 評価

本研究は、日本の若者研究の第一人者としての評価をすでに確立している久木元君がこれまでの自らの研究を総括し、1990年以降から2020年ごろまでの30年ほど間の若者の成人期への移行の質的な変化を分析したものである。とくに仕事にたいして若者がもつ意味付けに注目し、非正規雇用や未婚者の語りや自由回答の分析を通じて社会変動の中で仕事の意味が徐々に変容していくことが明らかにされている。

2023年12月23日に三田キャンパス431教室において本研究についての公開審査会が行われた。以下はその時に指摘された評価および課題を要約したものである。

まず本研究は、1990年代以降の雇用をめぐる社会的変化とそれに対する若者たちの主観的な意味づけの変化を非常に説得力のある形で提示した類例を見ない研究であるといえ、日本の若者・青年研究、ライフコース研究にとって非常に大きな貢献をなしたものと評価できる。

評価される第1の点は、ヨーロッパを中心とする成人期の移行に関する先行研究のレビューが広汎かつ入念になされ、概念や理論枠組みがきわめて簡潔に整理されていることである。これは後続の研究にとって貴重な情報を提供するものであり、今後の成人期の移行研究にとって必ず参照されるものとなるように思われる。

評価される第2の点は、成人期への移行が古典的モデルからヨーヨー型の移行へと変化していったことを多くのデータを使いながら巧みに実証したことである。日本の既存の研究はこうしたモデルの紹介に過ぎないものがほとんどだが、実際にデータを用いて明らかにした点は著者の大きな功績といえる。

評価される第3の点は、未婚化の進展や少子高齢化に伴う介護問題の通常イベント化といった人口学的な変化を背景として、若者が感じる将来及び現状への不安を透徹した分析によって描き出していることである。ライフコースの変容の中で人々はどのようにそれを経験しているのか、という問題は多くの研究者の関心事であるが、著者は的確なデータ処理と洗練された文体によって個別具体的なデータの抽象化に成功している。

本研究が評価される理由はその方法論にもあるといえる。本研究では公共利用データの二次利用による計量分析も行われているが(4章、5章)、通常はあまり利用されることのない質問紙調査における自由回答や公刊されているヒヤリング調査のインタビュー記録を分析対象にするという方法が全体の中心となっている(3章、6章、7章)。この方法の先達としては久木元君の指導教員であった故見田宗介・東京大学教授があまりにも有名であるが、久木元君は名人芸ともいわれた見田流のこの手法を見事なま

でに自家薬籠中のものとし、若者の自己と仕事とのかかわりにみられる「やりたいこと」の論理を析出しているほか、将来に対する不安やそれに起因する現在の状態への不安など、若者の主観的な世界の分析を巧みにやっている。人々の意味的な世界を理解し記述することは多くの社会学者の研究上の目標であるが、久木元君はこの方法を用いることでこの課題を達成することに成功しているといえる。エスノグラフィーのような長期的な参与観察とインタビューを併用する方法が最近の社会学の質的研究では主流になりつつあるが、久木元君は計量テキスト分析などの最近流行している手法を使うことなく、数千もの自由記述を丹念に読み込み、整理するという古典的な方法によって若者の主観的な世界を描き出すことに成功している。論文全体は、この自由回答の分析、公共利用データの計量分析、および雑誌の記事内容の分析（9章）と、複数の方法を用いた混合研究法を意識した構成となっており、それぞれの分析法の長所をうまくかみ合わせ、接続よく全体を構成し得たことも著者の並々なぬ力量の証左といえる。

一方、課題として指摘された点は以下である。仕事に対して「やりたいこと」を求めるという「やりたいこと」の特権性が次第に失われていった結果、今後、「やりたいこと」はそれでも重要な要素として残るのか、それとも重視されなくなるのか、という今後の展望に関する記述が限定されている点。久木元君の回答は、重要な要素でなくなるということはない、ということであった。また、雑誌の記事内容は、雑誌の広告主などの意向もあるために、もう少し雑誌の性格を分析する必要があるのではないか、という資料批判に関する課題。これに対する久木元君の回答は、その問題を認めつつも記事内容およびその変化は読者のニーズを反映している側面の方が強いと思われる、というものであった。さらに、全般的にジェンダーの視点がやや弱く、男性にとっての仕事と女性にとっての仕事の意味の差異とその変化に関する記述が限定されているのではないかと、という点。これについては、まずは男女をこえた自己と仕事の連関の変化を扱うことを優先した、ということであり今後はそうしたジェンダーに留意した分析を進めていく予定である、とのことであった。

IV 審査結果

このようにいくつかの課題は残されているものの、本研究の水準は圧巻というべき高さにあると判断できる。また、本研究は若者研究、ライフコース研究を超えて社会政策学や社会福祉学にまでも貢献している内容となっており、今後とも多くの研究者によって参照されるものとなると思われる。

審査委員一同は本論文を博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。

以上

博士（2023年度）

博士（教育学）[2024年1月17日]

報告番号 甲 第6118号 清水優菜

数学的問題解決における情意の機能に関する実証的研究

[審査担当者]

主査 慶應義塾大学教職課程センター教授・大学院社会学研究科委員

博士（教育学）（慶應義塾大学） 鹿毛雅治

- 副査 慶應義塾大学名誉教授・前大学院社会学研究科委員
博士（教育学）（慶應義塾大学） 安藤寿康
- 副査 横浜国立大学教育学部教授
博士（教育学）（早稲田大学） 池田敏和
- 副査 九州大学大学院人間環境学研究院准教授
博士（心理学）（名古屋大学） 伊藤崇達

論文の概要

本論文の目的は、日本の中学生と高校生を対象として、教授・学習場面および問題解決場面の両方において、数学における情意から数学的問題解決への影響プロセスを究明することである。論文の構成は以下の通りである。

第1部 理論的検討

- 第1章 数学的問題解決に関する基礎的考察
- 第2章 数学的問題解決の要因とその影響プロセス
- 第3章 情意から数学的問題解決への影響プロセスに関する基礎的考察
- 第4章 本研究の目的

第2部 教授・学習場面における情意から数学的問題解決への影響プロセス

- 第5章 中学生における影響プロセスの検討（研究1）
- 第6章 高校生における影響プロセスと数学の内容による差異の検討（研究2）
- 第7章 高校生における影響プロセスの内容による差異の検討①（研究3-1）
- 第8章 高校生における影響プロセスの内容による差異の検討②（研究3-2）

第3部 問題解決場面における情意から数学的問題解決への影響プロセス

- 第9章 高校生における影響プロセスの検討①（研究4-1）
- 第10章 高校生における影響プロセスの検討②（研究4-2）
- 第11章 中学生における影響プロセスと問題の複雑さによる差異の検討（研究5）

第4部 総括

- 第12章 総合考察

数学的問題解決は数学と数学教育における中心的な活動であり、その成果が当人の将来におけるアウトカムを予測する。それゆえ、数学的問題解決は、数学や数学教育のみならず、心理学や社会学などの様々な領域において、長年にわたり注目を集め続けてきたトピックである。しかし、この数学的問題解決という概念については、これまで多種多様な解釈がなされてきた。そこで、第1章では、数学的問題解決の定義と特徴について、先行研究に基づいて概観および整理をした。すなわち、数学的問題解決を「数学の知識を用いて、提示されていない解法や答えを求めること」と規定した上で、数学的問題解決の下位過程やその所産の特徴を整理し、我が国における現状として、児童生徒とも「計算や概念の意味に関する問題」と「記述式問題」の解決に課題があり、高校生では基礎的・基本的な計算問題の解決にも課題があることを示した。

では、数学的問題解決に影響を与える要因とは何であろうか。第2章では、数学的問題解決の要因とその影響プロセスについて、先行研究を概観し整理した。数学的問題解決の要因は、大きく「個人要因」、「課題要因」、「環境要因」に分けられる。個人要因としては、ジェンダーや社会経済的地位といった「人口統計的属性」、問題解決の指針となる技術である「問題解決方略」、ワーキングメモリなどの「認知スキル」、学習方略やエンゲージメント（学習に対する積極的な関与）などの「学習の取り組み」が主に取り上げられてきた。また、課題要因としては問題の構造や内容などの「課題変数」、環境要因としては「教師の指導・支援」と問題解決時の「プレッシャー」が取り上げられてきた。数学的問題解決の要因が影響するプロセスは、問題解決方略の影響を中心とした個々の問題を実際に解決する「問題解決場面」と、日常的な数学学習の取り組みと教師の指導・支援の影響を中心とした「教授・学習場面」に分かれることが示された。

しかしながら、多くの先行研究において、問題解決方略や認知スキルなどの認知的要因だけでは数学的問題解決を十分に説明できないことが指摘され、数学的問題解決の要因として「情意 (affect)」が注目されるようになった。第3章では、この情意から数学的問題解決への影響プロセスについて、先行研究を概観および整理した。まず、情意を「数学に関わる認知プロセス、あるいはその能力ではない変数を包括する概念」と定義した上で、数学における情意の構造を「認知・感情・欲求」と「特性・状態」という二次元にて整理した。次に、数学における情意の代表的な変数のそれぞれを認知的、感情的、欲求の側面に位置づけた。すなわち、認知的側面として、数学学習や数学的問題解決に取り組む目標である「達成目標」、数学学習や数学的問題解決に取り組むことの主観的な望ましさである「課題価値」、数学的問題解決を遂行することの確信である「自己効力」などを、感情的側面としては「数学不安」、欲求の側面としては自己決定理論に基づく「自律的ないし統制的な動機づけ」をそれぞれ取り上げた。そして、実証的研究、ならびに統制-価値理論などの理論研究のレビューから、認知的、感情的、欲求の側面の情意変数は互いに影響を与え合う可能性、また概念ごとに影響プロセスやその寄与の程度は異なるものの、情意は数学的問題解決や数学学習と関連する行動や認知を媒介して、数学的問題解決に影響を及ぼす可能性を指摘した上で、「情意から数学的問題解決への影響プロセスモデル」を提示した。

ただし、第3章で示されたこの影響プロセスモデルは、とりわけ欧米や中国での研究から導かれた暫定的な知見にすぎない。第4章では、情意から数学的問題解決への影響プロセスモデルに関する包括的な検証が望まれるとし、先行研究に残された課題として、次の4点を指摘した。第1に、数学的問題解決の要因を3要因以上同時に取り上げ、包括的な検討を行った研究がほとんど行われていないこと、第2に、教授・学習場面と問題解決場面のつながりを検討した研究がほとんど行われていないこと、第3に、認知スキルと問題解決方略、数学不安以外の要因において、課題変数がほとんど考慮されていないこと、第4に、数学的問題解決の要因とその影響プロセスにおける課題変数の寄与が詳細に検討されていないことである。さらに、我が国における数学的問題解決研究に目を向ければ、2000年代以降、統計的手法に基づいた検証は極めて数少なく、児童生徒の集団的な傾向を把握すべきだと指摘した。

そこでまず、第5章（研究1）では、中学生と数学教師を対象とした「埼玉県学力・学習状況調査」のデータを2次分析し、情意と学習の取り組み、教師の指導・支援が数学的問題解決に及ぼす影響を検討した。マルチレベル構造方程式モデリングの結果、勉強することが楽しいなどの自律的な学習動機づけは努力調整方略ならびに理解や精緻化などを重視した認知的方略の使用を媒介して、基礎的・基本的な水準の数学的問題解決を促すことが示唆された。さらに、数学教師が日々学習評価を行い、指導を改

善することで、基礎的・基本的な水準の数学的問題解決が促される可能性が示された。

第6章（研究2）では、PISA2012における日本のデータセットを2次分析し、情意、学習の取り組み、人口統計的属性、教師の指導・支援が数学的問題解決に及ぼす影響、ならびに、この影響プロセスが数学の内容により異なるかについて検討した。マルチレベル構造方程式モデリングの結果、自己効力が数学的問題解決を促す一方、数学不安はそれを阻害するものの、その相対的な寄与は「空間と形」や「量」などの数学の内容によって異なることが示唆された。また、男性あるいは社会経済的地位が恵まれている生徒において、数学的問題解決と教師の指導・支援を含めた要因が促される、あるいは有利な状況にある可能性が示された。

研究1と2を踏まえて、第7、8章（研究3）では、高校生を対象として、異なる数学の内容を学習している2時点において質問紙調査を行い、教授・学習場面における情意から数学的問題解決への影響プロセスが数学の内容によって異なるかについて検討した。パス解析の結果、「ベクトル」と「行列」といった数学の内容に関わらず、数学の熟達を目指す達成目標と数学の楽しさが数学学習への積極的な関与を高めることを通して、基礎的および標準的な水準の数学的問題解決が促されることが示唆された。他方、数学的問題解決の内容が複雑である、あるいは広範囲にわたる場合、情意や数学学習への積極的な関与が数学的問題解決に及ぼす影響は相対的に小さくなる可能性が示された。

これら第2部の実証的研究の結果から、教授・学習場面における情意から数学的問題解決への影響プロセスとして、情意が学習方略と数学学習へのエンゲージメントといった学習の取り組みを媒介して数学的問題解決に影響を与えることが示唆された。また、その影響プロセスは異なる数学の内容であろうと概ね同様であることが示唆された。他方で、数学的問題解決へ寄与する要因とその寄与の大きさは、内容の複雑さや範囲によって異なる可能性が示された。

第9、10章（研究4）では、高校生を対象とした数学の授業実践の場で縦断的な質問紙調査を行い、情意と問題解決方略から数学的問題解決への影響プロセスと、このプロセスに対する数学学習のエンゲージメントの寄与を検討した。その結果、「平面ベクトル」と「複素数平面」という数学の内容に関わらず、自己効力と評価場面における数学不安は、直接的に基礎的および標準的な水準の数学的問題解決に影響する、あるいは図表活用などの問題解決方略を媒介して間接的に影響することが示唆された。また、多母集団同時分析の結果、数学学習のエンゲージメントの水準（高さ）と変動性（個人内の時間的な安定性）によって、自己効力と数学不安、問題解決方略、数学的問題解決の関連の強さに差があることが示された。

研究4を踏まえて、第11章（研究5）では、中学生を対象とした数学の授業実践の場で縦断的な質問紙調査を行い、情意と問題解決方略から証明問題の解決への影響プロセスと、このプロセスに対する数学学習のエンゲージメントの寄与が問題の複雑さ（証明する手順の多さ）によって異なるかについて検討した。その結果、複雑さの小さい証明問題では、数学学習のエンゲージメントが平均以上の水準である場合、自己効力が後ろ向き推論の使用につながることで問題解決を促すことが示唆された。他方、複雑さの大きい証明問題において、数学学習のエンゲージメントが平均以下の水準である場合、自己効力は後ろ向き推論の使用につながり、問題解決を促すこと、ならびに数学不安は後ろ向き推論の使用を妨げ、問題解決を阻害することが示唆された。

これら第3部の実証的研究の結果から、問題解決場面における情意から数学的問題解決への影響プロセスとして、情意が直接的、あるいは問題解決方略を媒介して間接的に数学的問題解決に影響すること

が示唆された。また、数学の内容や問題の複雑さに関わらず、自己効力が数学的問題解決に及ぼす影響が大きいことが示された。さらに、数学学習のエンゲージメントの水準と変動性は、情意から数学的問題解決への影響プロセスに対して調整効果を及ぼすことが示唆された。

第12章では、第5章から第11章の結果を包括的に整理および考察した上で、情意から数学的問題解決への影響プロセスモデルをあらためて提示した。このモデルは、情意から数学的問題解決への影響プロセスの全体像を包括的に提示するものであり、数学教育学や教育心理学などにおける数学的問題解決研究に対して、情意から数学的問題解決への影響プロセスに関する先行研究を整理するとともに、今後の研究の指針となる枠組みを提供するものと考えられる。最後に、本論文の限界と今後の課題として、(1) 研究方法の偏り、(2) 数学的問題解決過程に対する諸要因の影響について十分に検討しているとは言いきれない点、(3) 認知スキルとプレッシャーといった他の重要な要因を取り上げていない点、(4) 教師の指導・支援の影響に関する分析が必ずしも十分とはいえない点を指摘してまとめた。

本論文の評価

本学位請求論文の審査については、主査と副査がそれぞれ査読した上で、2023年12月10日に行われた公開審査会を踏まえて合議し、評価の結果を以下のようにまとめた。

本論文の特徴は、教育心理学で主要な研究領域とされるモチベーションと、数学教育学の重要な研究テーマである数学的問題解決の両者を統合する立場に一貫して立脚し、理論的、実証的な検討を通して得られた研究成果を総合的にまとめた点に見出すことができる。本論文では、学習動機づけにおける情意プロセスを研究の主テーマとして掲げるとともに、数学教育の視座から具体的なカリキュラム領域や学習課題を直接的な対象として扱い、それらに対する生徒の数学的問題解決に焦点化した一連の研究を展開している。

数学教育学における近年の研究の中で、汎用的能力の育成といった観点から、いわゆる「非認知能力」の育成が大きな論点の一つになっており、モチベーションに関する心理学的な研究知見がますます求められている。一方、教育心理学においては、教科の学習内容やその固有性を踏まえた分析が軽視される学界の風潮がかねてより問題視され、研究の実践的意義が常に問われてきた。以上に鑑みると、本論文の特長は、数学に特化した「教科教育心理学」の成果であるという点に見出すことができ、そこに特筆すべきオリジナリティが認められる。

とりわけ、本論文の意義として以下の三点が挙げられるだろう。

第一に、先行研究に基づいた緻密な論理構成によって、数学的問題解決に関する数学教育学と教育心理学の知見を統合したモデルを構築し、それを実証した点である。例えば、モチベーション変数としてよく言及される自己効力については数学的問題解決との相関関係のみを示す先行研究が多い中で、本論文では自己効力が直接的、ないしは問題解決方略を介して間接的に数学的問題解決に影響するという因果モデルを複数の一貫した研究結果に基づいて実証しており、自己効力を高めることの意義を裏付けるとともに、そのための指導に対する実践的な根拠を提供している。また、モチベーションのプロセスにおいてパフォーマンスに最も近接した要因とされるエンゲージメントを分析モデルの中核に据え、その水準と変動性に着目して詳細かつ精緻な検証がなされている。近年の学習動機づけ研究において重要な現象として注目されている現在進行形のダイナミックなモチベーションプロセスの解明に寄与するという観点から学術的な価値が極めて高く、また教育実践と学習の具体的なプロセスを分析するという

観点からも意義深い。

第二に、教授・学習場面と問題解決場面の両面を取り上げ、その相互関係にアプローチしているという点である。教育心理学研究の趨勢として、これら二つの場面の関係について明示的に迫る研究は必ずしも多いとはいえない。本論文は、両場面の相互関係について、理論的、実証的に検証を進めており、心理学的な問題解決のモデルとして着目されている自己調整学習の機序の解明という観点からも極めて意義深い。また、モチベーションの三水準とされる特性レベル、領域レベル、状態レベルの相互規定のあり方の一端が示されている点にも大きな意義が認められる。とりわけ、自己効力に関してはとすると測定が容易な特性レベルの変数として扱われる傾向がみられるが、本論文では一貫して生徒が問題解決場面に直面した際に測定する状態レベルの変数としてそれを扱っており、希少なデータを基盤として価値ある研究結果を導いている。

第三に、課題変数、人口統計的変数も含め、多様な心理学的要因を取り上げ、分析手法を巧みに駆使して、包括的かつ統合的に実証する試みがなされているという点である。とりわけ、本邦において、数学の成績そのものを扱った研究が必ずしも多いとはいえない中、パフォーマンス指標について、単なるテスト得点、総合得点として集約せず、より明示的、具体的な変数を検討することを通して、所産の内実と教科内容の具体を解明する知見を示したという点に独自の価値が認められる。また、人口統計的変数としてSESやジェンダーに着目することで、教育の社会問題にも迫りうる知見も示されている。さらに、数学教育のカリキュラム領域や具体的な学習課題をも加味しながら、認知要因はもちろん、教育心理学研究で重要視されてきた主たる情意要因を網羅的に取り上げて検証を試みている点においても新規性が高く、独自の意義がある。しかも、マルチレベル分析をはじめとする多変量解析を駆使しつつ、教師の指導・支援を含む学校レベルの検証からエンゲージメントを含む状態レベルの検証までを包括しており、重層的で多面的な検討によって、数学の学習プロセスの様相とその本質を立体的に浮かび上がらせることに成功している。

以上のように本論文は教育心理学と数学教育学を架橋した統合的な学術的成果として高く評価できるが、その一方で、以下に示すような問題点も指摘できる。

まず、論文全体の統合性の問題である。各実証研究が相互に独立して分析、考察されており、それぞれは精緻化された研究成果といえるものの、それらの有機的な関連について十分な説明がないまま一つに束ねたという印象が拭えない。例えば、本論文では課題変数に着目する必要性について言及しているものの、数学的活動における数学としての問題解決と日常生活での問題解決の区別といった課題類型に関する理論的な整理が不十分であり、両者が混在したまま、一連の分析や考察がなされている。

また、教育場面と学習場面の区別や両者の関連が必ずしも明確でない点も問題点として指摘できる。上記の通り、教授・学習場面と問題解決場面の両面を取り上げて検討している点が本論文の特長として認められる一方、例えば、問題解決方略が教授・学習場面の外側に独立して位置づけられている点など、両場面の概念的な区別やモデル上の位置づけの妥当性についての検討は必ずしも十分ではない。

さらに、先行研究に基づく概念分析が必ずしも十分ではない点も指摘できる。本論文で扱われている概念（例えば「知識」）に対する先行研究や概念間の関連（例えば、各学習方略の機能上の差異や相互関連）に関する分析にはやや物足りなさが感じられた。

また、本論文で十分に明らかにできず今後に残された課題としては、(1) 本論文で対象としている中学生と高校生について、発達上、さらには教育上の観点から学校段階の差異について検討する必要がある

るという点、(2) 因果モデルの原因とされている情意変数が同時に結果である可能性についての精緻な分析が求められるという点、(3) 縦断研究として個人内変数の安定性や再現性に関するさらなる分析が必要であるという点、(4) 情意への教育的介入の可能性に関して実証に基づくさらなる学術的検討が求められる点などが指摘できよう。

本論文に内在する以上の問題点や課題については、清水君自身が十分に自覚的であることが公開審査会にて確認された。むしろ、これらは同君における今後の研究の発展の方向性や可能性を示唆するものであり、本論文の価値を損ねるものでは決してない。

以上のことから、審査員一同は、清水優菜君が提出した本学位請求論文は、博士（教育学）（慶應義塾大学）の学位授与に十分相応しいものと判定し、ここにその旨を報告する。